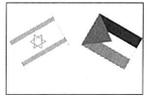


パレスチナ イスラエル : 消えゆく「幸せの小さなパン生地」

著者	菅瀬 晶子
雑誌名	食文化誌ヴェスタ
巻	71
ページ	40-41
発行年	2008-08-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/5244



パレスチナ・イスラエル 消えゆく「幸せの小さなパン生地」

菅瀬 晶子 (すがせ あきこ)

1971年生まれ 東京都出身

総合研究大学院大学葉山高等研究センター 上級研究員

専門分野 ● 文化人類学、中東地域研究。パレスチナ・イスラエルのアラブ人キリスト教徒のアイデンティティのありかたについて研究。

著書 ● 『宣戦布告なき戦争の時代』(共著)、『イスラエルのアラブ人キリスト教徒』(いずれも近刊)

「アジーン・アル・バラケ」(神の恵みのパン生地) 新しく花嫁を迎えた家の戸口に貼られる (筆者撮影)



パレスチナ・イスラエルのアラブ人の農村を歩いていると、たまに家の戸口に、さまざまな「異物」がこびりついているのに出くわすことがあ

る。赤黒いペンキのような手形が、壁にいくつも並んでいる場合、それは家主のメッカ巡礼を祝うためのものだ。ペンキかと思われたものの正体

は、実は犠牲の羊の血。巡礼祝いだけではなく、中東一帯では祭の日などに羊を屠り、その血を戸口に塗りつけて魔除けとする風習がある。血を均一に塗りつけるのではなく、手形をわざと残しているのも、邪視をはねかえすための手形のお守り「ハムサ」にちなんでのことである。

もうひとつ、しばしば見かけるのは、玄関の扉近くの壁に貼り付けられた、丸く平べったい粘土状のものだ。近寄ってよくみると、小銭や野草の花びらが埋め込まれて、なにやらまじないめいた雰囲気

を醸し出している。実はこれはパン生地で、新しいうちはなかなか可愛らしいのだが、古くなって褐色にひからびてしまうと、みすばらしいことこの上ない。それでも人びとは決してこれを剥がしてしまふことはなく、時の過ぎゆく

ままにまかせ、時折いとおしそうに眺めていたりもする。それもそのはず、このパン生地は犠牲の羊の血と同様、魔をはねかえす役割を担う大切な護符であり、新しく花嫁を迎えた家の戸口にだけ貼られる、いわば祝福と幸運の印でもあるのである。アラビア語で「アジーン・アル・バラケ」、つまり「神の恵みのパン生地」と呼ばれている。

実はこのアジーン・アル・バラケ、農村ではしばしば見かけるのだが、都市ではあまり見かけない。その理由は、農村と都市の、結婚式の違いにある。ナザレ出身の映画監督ミシェル・クレイフィの初期作品、「ガレリアの婚礼」でも描かれているように、もとアラブ人の結婚式は親族総出で準備して祝う大がかりなものだ。花婿の家の前庭や居間を開放しておこなわれる

披露宴では、遠方からも客を招いて一昼夜、飲めや唄えの大騒ぎとなる。アジーン・アル・バラケはこの披露宴の直前、つまり結婚の契約を交わした直後の花嫁が、はじめて花婿の家の敷居をまたぐとき、

姑からそつと手渡される。パン生地はごくふつうのもので、小銭を埋め込むのは富をもたらしように、花をあしらうのは、新婚生活がすばらしいものになるようにという願いを込めてのことだ。花嫁はパン生地を掌に載せ、扉の横の壁にべたりと貼り付けてから家の中に入るのだが、この瞬間こそ、彼女がその家の一員として迎え入れられた証となるのである。一瞬の静寂ののち、カメラを構えた招待客の間からは一斉にフラッシュが焚かれ、女性たちは舌を震わせて、歓喜のしるしであるザグラーダの声を響かせる。昔ながら

のアラブの結婚式における、このときこそがまさにクライマックスである。

ところが、このような花婿の自宅で祝う伝統的な結婚式の情景は、近ごろ都市ではほとんどみられなくなってきた。

結婚の持つ意味そのものが、農村と都市とは違ってきた。農村においては、結婚とは農村社会の基盤である血縁関係を強化するために、家同士が結ぶ契約である。しかしながら、ユダヤ人社会の影響を受けて核家族化が進み、血縁の力が薄れつつある都市において、結婚はもはや家同士を結びつけるものではない。それは当事者である若者たちが自分の意思で選んだ相手とともに、親から独立して新たな生活へと踏み出す、あくまで個人的な契機となっていてるのである。結婚を決めると、彼らは懸命に働い

て貯めた貯金を崩して郊外の大宴会場を予約し、ケータリング・サーブिसに招待客にふるまう料理いっさいをまかせて、盛大に披露宴をおこなう。

ただし、招待客は遠い血縁者よりも学生時代の友人や職場の仲間が優先されて、生バンドが演奏するのも昔ながらの祝い歌ではなく、流行のアラブ・ポップスである。式が終われば、若いふたりが帰るのは花婿の実家ではなく、新たに購入したアパートの一室だ。もはや自宅でおこなわれなくなった結婚式に、アジーン・アル・バラケの出る幕はない。そんな近ごろの風潮を、若者たちの親や祖父の世代は、「時代が変わったのだから」と冷静に眺めている。しかしながら、そこは彼らとて、思ったことは口に出さなくては気の済まないアラブ人だ。やたらと騒々しいばかりで料理は

まずく、風情のない今どきの披露宴や、休日の食事めあてに、自分の都合のよいときだけ孫たちを連れて来る若い夫婦を、年寄りのみの井戸端会議で痛烈に揶揄することは忘れない。しかしそんな彼らも、今や花嫁の到来を祝福するのではなく、単なる魔除けとして新車のバンパーに貼り付けられるようになったアジーン・アル・バラケを目にするのと、心なしかさみしげな風情を垣間見せる。その遠い視線の先に、彼らは時代の変遷とともにうつろい、消えゆく過去の風景を夢みているのかもしれない。